令和５年度

第33回島根県雲南市

永井隆平和賞

入賞作品集

島根県雲南市教育委員会

目　次

Contents

小学生低学年の部

最優秀賞　おとなになるだいいっぽ　島根県・雲南市立鍋山小学校　名原元樹
優秀賞　すなおな気持ち、やさしい言葉　島根県・雲南市立掛合小学校　石﨑いろは
佳作　みんながしあわせ、わたしもしあわせ　島根県・雲南市立三刀屋小学校　松尾扶美

小学生高学年の部

最優秀賞　愛他的な「普通」を求めて　島根県・雲南市立掛合小学校　朝山華乃
優秀賞　戦争は犯罪ではないの？　島根県・雲南市立寺領小学校　山根旺大
佳作　私たちの生活と平和　島根県・雲南市立海潮小学校　山根美心
佳作　「一歩一歩で世界を変える」　長崎県・長崎市立山里小学校　大坪紗千

中学生の部

最優秀賞　彼女の笑顔を見る、その時まで　韓国・ソウル日本人学校中学部　五味愛琳
優秀賞　切明さんの愛を受け取って　広島県・盈進学園盈進中学校　山本花奈
佳作　今私が問い正したいこと　沖縄県・那覇市立寄宮中学校　大島千香
佳作　声なき声の叫びから未来へ　沖縄県・糸満市立高嶺中学校　大城果音

高校生の部

最優秀賞	戦争が作り出す未来	島根県・大多和学園開星高等学校	大月 玲
優秀賞	「如己愛人」と僕らの未来	大阪府・清風学園清風高等学校	田中 泰斗
佳作	関係を結ぶ	東京都・田園調布雙葉学園高等学校	中嶋 優花
佳作	Never Give Up ～ヒロシマの信念を受け継いで～	広島県・盈進学園盈進高等学校	大下 真緒

一般の部

最優秀賞	あなたのままでいい	徳島県	天竹 勉
優秀賞	『いのる』から『つくる』平和へ	埼玉県	見澤 富子
佳作	反戦平和を伝え続ける朝顔の種	島根県	幸田 和彦
佳作	後悔の共有	愛知県	伊藤 和泉

最優秀賞

おとなになるだいいっぽ

島根県雲南市立鍋山小学校一年
名原元樹（なばらげんき）

ぼくは、ほいくしょのおでかけで、ながいたかしきねんかんにいったことがあります。はかせがかいたえがたくさんありました。

しょうがっこうにはいってから、はかせのほんのよみきかせをききました。はかせは、ばくだんがおちたときに、おおけがをしたのに、ちだらけでたくさんのひとをたすけました。すごくつよいひとだとおもいました。でも、いえにかえったときにいえがやけていて、おくさんのみどりさんがいなくてさがしました。はかせは、みどりさんのほねをみつけてひろいました。みどりさんのかおがみられないからとてもかわいそうでした。ぼくもかなしくなりました。

でも、はかせはなかないで、ずっとひとをたすけていました。ほんとうにはたらきもので、こころがつよいとおもいました。

ぼくには、99さいのおばあちゃんがいました。やさしくてだいすきでした。はかせがいたときにおばあちゃんもいきていたときいてびっくりしました。

ぼくが、はじめてそくてんができるようになったときに「おとなになるだいいっぽだよ。」と、ほめてくれとてもうれしかったです。がんばってれんしゅうしてよかったです。おばあちゃんは、びょういんにゅういんしていました。さいごにあったとき、おばあちゃんがちいさいこえで、

「てんごくでもみているよ。」

といいました。そのあと、なくなりました。

ぼくは、はじめておそうしきにでました。かそうばにもいきました。

「ぼく、がんばるからね。」

おばあちゃんにやくそくしました。とてもかなしかったけれど、ちゃんとおわかれができたから、おかあさんがほめてくれました。

はかせは、さいごにみどりさんにあえなかったけど、みどりさんがてんごくからみているからがんばったのかな。ぼくは、そんなきもちがします。

ぼくのおとうさんも、はたらきものです。くるまのしゅうりをするおしごとをがんばっています。ぼくやおにいちゃんやおねえちゃんのためにぶらんこやたあざんをつくってくれます。つよくてかっこいいです。ぼくも、おとうさんみたいにつよいおとなになりたいです。それから、たくさんのひとのやくにたちたいです。

おばあちゃん、みていてね。

優秀賞

すなおな気持ち、やさしい言葉

島根県雲南市立掛合小学校三年
石崎（いしざき） いろは

わたしは、学校の勉強で雲南市めぐりをしました。そのときに永井たかし記ねん館に行きました。そこで永井たかしさんのお話を聞いて、せんそうをすることは、とてもかなしいことだし、みんながなかよくなればいいのになと思いました。だから、わたしは、みんながなかよくなるための方法を考えました。

わたしには、小学一年生の弟がいます。いつもはとてもなかよしだけど、この前けんかをしました。弟がお茶をこぼしたので、わたしがかたづけを手伝ったのに、弟は「ありがとう」も言わずにどこかへ行ったからです。そのあと、弟と言い合いになって、わたしは、「あっちいって。」と強く言ってしまいました。言ってからすぐに、「いやなことを言ってしまったな。」と思いました。弟はなきそうになっていました。弟が「ありがとう」を言わなかったのはよくないけど、わたしがいやなことを言うのもよくないなと思いました。だから、わたしはすなおに「ごめんね。」と言いました。そうしたら、弟がえがおになりました。弟からも「ごめんね。」と言ってもらって、なか直りができました。わたしは、弟といっしょに遊ぶのが大すきなので、また弟となかよしにもどれてよかったです。このことから、自分がわるかったなと思ったときは、すなおに「ごめんね。」を言うと気持ちが伝わるし、なか直りもできることがわかりました。「ごめんね。」をすなおに伝えることは、みんながなかよくするための方法だなと思いました。

また、「あっちいって。」みたいに人がきずつくことを言わずに、やさしい言葉を言うことも大切だと思いました。雲南市めぐりのときに、「にょこあい人」という言葉をしりました。永井たかしさんは、人のことも大切にしていたんだなと思いました。人がきずつくことを言うと、人がいやな気持ちになるから、やさしい言葉を言うようにしたいです。ほかにも、友だちや家族にうれしくなる言葉をかけてあげたいです。うれしくなる言葉を使うと、みんながうれしい気持ちになって、みんななかよしになると思います。やさしい言葉やうれしい言葉を言うために、人のことを大切に思う気持ちを大事にしたいです。

みんながなかよくするって平和だなと思います。わるかったことはすぐあやまったり、やさしい言葉を使ったりすることで、家族や友達ともっともっとなかよくなりたいです。

佳作

みんながしあわせ、わたしもしあわせ

島根県雲南市立三刀屋小学校三年
松尾扶美

わたしたちのまわりには、たくさん食べ物があります。だけど、せんそうやふんそうが起きて、食べ物にこまっている人もいます。

わたしたちもケンカをするけれど、もっと大きいケンカをすると、いのちにかかわるせんそうになることがあります。

わたしは学校に行くことができて、友だちにも会えて、家ぞくもいて、みんなと話すことができます。

このように、いつも通りの生活ができるということが、平和ということなのだと思います。

むかし、アメリカと日本がせんそうをした時に、げんばくというものが落ちてきて、たくさんの人がなくなりました。だけど、その中でも生きていた人たちがいて、生きていてくれたおかげでわたしたちが生きているのだと考えたことがあります。げんばくが落ちたことは、たいへんなことだと思いました。なぜなら、日本という小さな国に、世界ではじめてげんばくが落とされたことを知ったからです。

三刀屋出身の『ながいたかしはかせ』は、げんばくが落ちて自分もけがをしてつらかったはずだけど、人のことをたすけたことを知って、

「はかせは心が美しい人だな。」

と思いました。ながいたかしはかせは、自分もつらいけれど、人がみんな元気になって、わたしたちがまたいっぱい遊ぶことができるように、いっしょうけんめいびょう気をなおそうとしてくれたのだと思いました。この文を書きながら、

「ながいたかしはかせはやっぱりすごい人なのだろうな。」

と考えました。

わたしたちがここにいて、生きているのは、ふつうのことではないのかもしれません。むかしの人がいっしょうけんめい生きてきて、いのちをつないで、わたしたちがここにいます。わたしは、いのちを大切にするのと同じくらい、お家の人がつけてくれた名前を大事にしようと思っています。なぜなら、わたしをうんでくれて、いのちをくれた家ぞくがつけてくれた名前だからです。

むかしの人たちはせんそうでなくなった人もたくさんいるけれど、わたしたちはこれからもせんそうはしないのでしょうか。分かりません。ずっとせんそうはせずに、平和であってほしいと思います。

人と人がつながって、たすけあって、この世界ができています。スマホやパソコンのように、むかしはなかったものも、今はあります。会いたい人、話したい人とも、すぐにつながることができます。人と話せる、なかよくできることはいいことですね。

「みんながしあわせなら、わたしもしあわせだな。」

最優秀賞

愛他的な「普通」を求めて

島根県雲南市立掛合小学校六年
朝山華乃

皆さんは「普通」という言葉を聞いたことがありますか。もちろん多くの人が聞いたことのある言葉だと思います。でも、「普通」って一体どういうことなのでしょうか。

私は、お父さんやお母さんによく言われる言葉があります。それは、「女の子だから。」という言葉です。私は自分のことをたまに「俺」と言うことがありますが、その時すかさず「女の子なのに・・・」と言われます。また、片づけをちゃんとしていないと、「女の子なんだから・・・」などと言われます。これは、お父さんやお母さんにとって「女の子の普通」なのかもしれないけど、私にとっては普通じゃないのです。そう考えるとますます普通がどういう意味なのか分からなくなりました。国語辞典で調べてみると、「いつも。たいてい。」という意味が出てきました。私はこの意味を見て、お父さんやお母さんは「女の子がいつもしていること」を私に求めているのだと分かりました。でも、私も思い出してみると、「普通こうでしょう。」などと使っている時があります。そういう時は、「普通」という言葉を使うことで、人に自分の当たり前をぶつけていたり、自分を中心として考えていたりしている時だということに気が付きました。さらに、自分と相手の普通がぶつかり合うことでけんかや、ひどくなれば戦争にまで発展してしまうのだろうとも考えました。だから私は、「普通」という言葉を使って、自分の当たり前をぶつけるのではなく、互いの普通を尊重して、相手に寄りそいながら会話をしようと思います。自分を中心として話すのではなく、相手の普通を予想したり、客観的に見て会話をしたりすることが大切だと考えます。

私は永井隆記念館に行って、永井博士の生き方を学びました。博士は、自分が白血病になっても、すべての人の命を平等に助けようと力を尽くされました。命がけで人の命を救った博士の生き方は、かっこいいなと思いました。博士の生き方から、すべての人を大切にする、つまりすべての人の「普通」を大切にすべきだと教えられたような気がします。

そしてもう一つ、なくてはならない普通があります。それは「戦争は普通しない。」「人が嫌がることは普通しない。」などです。この普通がなくなってしまうと、日本が平和な国ではなくなってしまいます。つまり、永井博士が願ってこられた平和も、実現できなくなります。だから私は、人を大切にしない普通はなくしたいと思います。一人一人にちがう「普通」があり、その一人一人の「普通」を大切にする世の中こそが平和な世の中なんだと思います。だから私は、永井博士の如己愛人の言葉のように、愛他的で皆の事を守るような「普通」を大事にしていきたいです。そうすることで、すべての人の「普通」を守っていけるのではないかと思います。

優秀賞

戦争は犯罪ではないの？

島根県雲南市立寺領小学校六年
山根旺大

弟とけんかした。ゲームの取り合いでけんかした。ぼくは、一人でゲームをしたかった。でも、弟は、ぼくと二人でしたかったようだ。

お母さんが言った。

「お兄いちゃんは、いつもやってるからたまにはいっしょにしてあげなさい。」

ぼくは少し不満だったけど、いっしょにゲームをした。やっぱり楽しかった。

お父さんと弟もけんかをした。弟が

「今日は学校へ行きたくない。」

と言ったのが原因だった。

お父さんは何とか学校へ行かせようとおこる。弟は行きたくないと言っておこる。その二人を近くで見ているとだんだん自分も腹が立ってくる。

そして、弟に

「ちゃんと学校へ行けよ。」

とどなってしまう。

何ですぐおこってしまうのか、おこった時の気持ちは最悪なのに。

ぼくは、友だちともけんかしてしまうことがある。やっぱり最悪な気持ちになってしまう。家族や友だちとなんでけんかしてしまうのか。身近にいるからついつい自分がわがままになっているのかな？それともぼくの性格が短気なのかな？

でも、ぼくのけんかやいかりは意外と短い時間で終わってしまう。そして、たたいたり、けったりする暴力には発展しない。

テレビでは、ロシアとウクライナの紛争が毎日のように流れている。ぼくは、ニュースを見ながら

「これは国と国とのけんかかな？」

と思う。

でも、ぼくのけんかとはちがう。銃やミサイルを使っている。最悪な暴力だ。

社会科で裁判の学習をした。罪を犯した人は、裁判を受けて罪をつぐなうのだ。たとえば、殺人をしてしまった人は、刑務所に何年も入ったり、時には死刑になることもある。

でも戦争は罪ではないのかな。

相手の国へミサイルをうちこむ。誰が死んでしまうか、わからない。大人かもしれない。老人かもしれない。生まれたばかりの赤ちゃんがそこにいるかもしれない。

こんな無差別な殺人なのに、ミサイルをうった人は罪にならないのかな？ミサイルをうつように命令した人は罪にならないのかな？ミサイルを作った人は罪にならないのかな？

もし、ぼくが兵隊で、ミサイルをうったならば、そして、うったミサイルでたくさんの人が亡くなったら、きっとぼくは、一生そのことを忘れないと思う。きっとぼくは、一生人を殺したことをくやむと思う。

どうか暴力で何とかしようとしないで欲しい。相手の国の人を殺してしまう戦争をぼくは認めたくない。ぼくのやさしいけんかのようにあって欲しい。

佳作

私たちの生活と平和

島根県雲南市立海潮小学校六年
山根（やまね）美心（みこ）

私たちが当たり前に思っている生活は、当たり前ではない。昔は、外で爆弾が飛んできていたり、小学校では軍事訓練、校庭を畑にしたりと大変な生活だった。

毎日帰ると、「お帰り。」と優しく声をかけてくれる祖父母。祖父母は戦争の中で生活をしていた貴重な人物だ。そんな祖父母に、戦争のことを聞いてみた。

祖父は、曾祖父が祖父に向けて書いた手紙のことを話してくれた。手紙の内容は、「昭吉よ　お前と別れて十一日後より色々な乗り物に乗りて任地について元気です　お前達も元気で学校に行きますか　うちは皆元気かね　お前等も元気で学校へ行きなさい　どうかね島根の方も暑いでせう　サヨナラ」という内容だ。驚いたのは、この文章には暗号が隠されているということだ。兵隊は、自分の居る場所を手紙に書くのは禁止されていたそうである。書いてあるものがあれば、その部分だけ塗りつぶされていたそう。だが、曾祖父と曾祖母は面会時、任地を知らせるはがきを出すと約束し、さらに、「点から下二文字を読め」と約束したという。このはがきに書いてる点の二つ下の一文字を繋げて読むと、「いおう島」と読むことができる。曾祖父は硫黄島という島にいたのだ。祖父をふくめ、五人の子供たち。そして、祖父の母、祖父母。一通のはがきによってこの八人の家族は元気づいたそうだ。

先日、雲南市の遺族会の方にも話を聞く機会があった。この時衝撃を受けた話は、戦争で亡くなった方は、三百十万柱、その中で海外などの場所にある、家に帰れていない白骨化した遺骨は、百十二万柱というのだ。この数の意味が分かるだろうか。百十二万というと雲南市の人口を四万とみても、雲南市の人口の二十八倍に当たる。こんな数の遺骨が、家に帰られていないのだ。追悼式という遺族が悲しみを発信する式典がある。この式典に参加すれば、戦争を知らない私たちも戦争をしてよかったと思うことなどないと思う。私の祖父もこの追悼式で三十分にわたり追悼文を読んだという。

祖父に話を聞くほか、資料を見せてもらった。追悼式で祖父が読んだ作文の内容を目にした。その内容の中には、曾祖父が戦死し、泣いている祖父たちに大声で、

「泣くんじゃない！悲しくない！」

と。これが村長さんのちょうもんの挨拶だったそうだ。

これを踏まえ、私たちが戦争をまた引き起こさないこと、私たちが暮らしている生活は当たり前ではないことを忘れないようにしたいし、心の中で知っておいてほしいと思った。

また、私はおいしいご飯を作ったり、働いたりしてくれている親に感謝して生活していきたいと強く思った。

佳作

「一歩一歩で世界を変える」

長崎県長崎市立山里小学校五年
大坪紗千

「衣食住。」この言葉は、「着るもの」「食べるもの」「住む所」の三つの生活の大切な基礎であることを表している。この言葉を、塾で習った。その三つは、私たちの生活の中にあって当たり前のものだ。しかし、その三つの条件が不足していることがある。それを、「貧困」という。「生活の中で、あって当たり前なことが無い」ということは、あってはならないと思った。そこで、「貧困」について調べてみることにした。

世界では、およそ六人に一人の子どもが、きびしい貧困の中でくらしているという問題が起きている。世界の中では、戦争や気候変動、感染症が起きている。これらにより、貧困が悪化してしまうケースがある。

また、日本では、七人に一人の子どもが、貧困に直面している。おもな貧困の理由は、働くことができず、お金が無いことだ。他にも、戦争によって住む所が無くなるなど、理由は様々だ。このことから、いろいろな場所の、いろいろな形の貧困を終わらせる必要があることが分かる。

このような問題を解決するための取り組みがある。例えば、世界各地で「募金活動」が行われている。四千円の支援では、汚れた水を安全な水に変える薬、六千円の支援では、子どもの栄養不足を治すための栄養食、一万円の支援では、子どもたちの命を守るためのワクチンに変えることができる。

また、日本では「フードバンク活動」が行われている。「フードバンク活動」とは、賞味期限が近いなどの、品質には問題ないが、販売することが難しい食品、食材を寄付する活動のことだ。

世界や日本での問題やその取り組みについて調べて思ったことが二つある。一つ目は、世界では貧困があることは知っていたが、日本にも、貧困があることを知り、おどろいたことだ。テレビなどで、「世界には、貧困で苦しんでいる人もいる」と聞いたことがあるので、「世界には貧困がある」と予想をしていたが、どこにでもある問題だと知り、印象に残った。二つ目は、世界の貧困問題を無くすために、世界は様々な取り組みをしていて、たのもしく思ったことだ。私も、協力したい。そのためには、今、私ができることを始めるべきだ。私にできることは、「募金活動に参加する」「人を思いやる」ことだ。募金活動に参加すると、いろいろなものを寄付することができる。一人のお金が少なくても、他の人と協力すれば、たくさんのお金が集まる。人を思いやると、みんながしあわせになれる。すると、身近にいる貧困の中でくらしている子を仲間はずれにすることはなくなる。このように、協力をすれば、一人の力は小さくても、大きな力になる。私は、これらの二つの活動を、みんなで協力して行い、小さな一歩を大きな一歩に変え、世界を変えたい。

最優秀賞

彼女の笑顔を見る、その時まで

韓国ソウル日本人学校中学部三年
五味（ごみ） 愛琳（まりん）

「アンニョンハセヨ」

私は、ある女性に会う為に、韓国と北朝鮮の間にある非武装地帯を訪れ、練習してきたその言葉を口ずさんだ。はるか遠くまで北朝鮮の平原を見渡せ、風の音と鳥のさえずりだけが聞こえる静かなその場所は、とてものどかであった。ただ、視線をその手前に移すと、そこには、有刺鉄線付きの高いフェンスが遠くまで続き、銃を持った兵士がこちらを見張っている様子が肉眼でも見え、そこが平和な場所でないことが分かった。

三度の脱北に失敗し、手と顔に強制収容所での拷問の傷跡が残る女性に私は会った。彼女とは、韓国語で話がしたかったので、事前に質問内容を準備し、約束の日を待った。

その人は私とちゃんと話をしてくれるだろうか。彼女に会う前は、不安と緊張で、のどが渇き、持っていたペットボトルがすぐに空になるほどだった。

「アンニョンハセヨ」

彼女の方から掛けられた言葉に、私も準備していた挨拶をし、彼女と握手をした。彼女の生い立ちや北朝鮮での生活の様子を聞いた。小さい時に両親が死に、兄弟三人で生活をしてきたこと。その後、弟も亡くなったこと。

私は、彼女の話を最初、信じることが出来なかった。死をこんなにも近くで感じることもなかったし、また、親なしでの生活も想像すら出来なかったからだ。

「多くの人が今も飢えで苦しんでいる。自由を求め命がけで北朝鮮から脱出する人がいる」「この事実を多くの人に伝えて欲しい。」

彼女は目に涙を浮かべ、握った手を更に強くし、私に訴えた。

ソウルから五十キロも離れていないすぐ傍に、このような現実があることを知り、驚くと共に、当たり前の平凡な私の今の生活が、彼女にとって、異常なことであることが分かった。

韓国でも日本でもメディアでは、ミサイル発射や核実験のことばかりが報じられ、北朝鮮人の実情を伝えることはほとんどない。そのため、私のすぐ傍でこのようなことが起こっていることすら想像出来なかった。

「この事実を多くの人に伝えて欲しい」という彼女の想いを実現させるため、私たちは、もっと他の国にも関心を持ち、どうすれば苦しんでいる人を助けることが出来るのかを一人一人が考える必要がある。

食糧支援についても国連世界食糧計画を通じ、何度となく北朝鮮に支援が行われたが、彼女は、「一度も北朝鮮でそのような食糧援助を受けたことが無い。韓国に来て、今まで多くの支援がなされたことを知り驚いた」と話してくれた。これは、今までのやり方では、本当に困っている人に、必要なものが届かないということを示している。しっかり、国民に行き渡るよう監視を前提とした援助を行っていくべきなのだ。また、北朝鮮の実情をしっかりメディアが報じ、北朝鮮の外部から圧力をかけていくことも必要である。

今のこの時代に、偶然、北朝鮮で生まれ苦しんでいる人がいることを真剣に考えるべきで、もしかしたら、自分がそこにいる可能性があることを認識すべきである。この事実を、自分事として受け止め、自分に何が出来るかを考えていく必要があるのだ。

私は、将来、国と国の交渉では解決できないこのような問題に取り組むため、国を超えた組織である国連で仕事をしたいと考えている。そして、北朝鮮の実情をより多くの人に知ってもらうよう戦略的な告知を行い、世界を巻き込み平和的な解決を共に考え、アジアに平和な社会をもたらしたい。

彼女との出会いは私の人生を大きく変えるきっかけを与えてくれた。今度は、私が彼女の想いを実現させるときだと考えている。

彼女に笑顔が溢れるその時まで。

優秀賞

切明さんの愛を受け取って

広島県盈進学園盈進中学校二年
山本花奈（やまもとかな）

「あなたたちに私の平和への願いが伝わってうれしい。」そう言って、私の手をぎゅっと握ってくださった。78年前に広島で被爆した切明千枝子さん（93才）の体温が伝わった瞬間だった。そのとき私は、被爆者の体験を直接聞ける最後の世代としての責任を身体いっぱいに感じて、ある決意をした。

それは今年6月、「ノーモア・ヒバクシャ継承センター」総会でのこと。私は、仲間たちと「聞け、被爆者の声を」というテーマで、参加者約60名を前に発表の機会をいただいていた。発表は、切明さんの被爆証言を中心に構成していた。学校の先輩方が以前、切明さんの証言を聞き、自分たちで文字に起こし、『ヒロシマを生き抜いて』というタイトルの冊子にまとめていたので、その中から印象的な被爆の実相を取り出し、盛り込んでいたのだ。切明さんは、冊子の中で「あの日」を、こう語っていた。

「私は奇跡的に生き残ることができたのよ。でも、学徒動員に出ていた下級生たちはみな、全身火傷。腿から下が焼けちゃって、皮膚がペロンと剥けて、それを引きずって、時には、自分で自分の皮膚を踏んづけながら、学校に帰って来たんですよ。『お母さん、痛いよ、熱いよ』って、うめきながら、そして、泣きながら、一人また一人、死んでいったの。それはもう、地獄でございました。」

発表の前には、切明さんの被爆証言もあり、私は、その「地獄」を彼女の口から直接聞いて心を揺さぶられた。それだけに、発表には力がこもった。ただ、正直に言えば、切明さんの被爆証言をご本人の前で発表するのはとても緊張した。でも逆に、うれしさもあった。間近で聞いてもらうことで、私たちが切明さんから平和のバトンを確かに受け取ったことを伝えることができる。私たちがその魂を受け継ぐのだと安心してもらえる。そんな気持ちが入り交じっていた。切明さんは、前のめりに、私たちの発表を聞いてくださっていた。

冒頭は、総会終了後の場面。私の決意はこうだった。「切明さんをはじめとする世界中のヒバクシャと先輩たちの思いを受け継ぎ、私が核廃絶の街頭署名活動の中心を担う。」

16年前、私の学校の先輩方が、広島の平和公園を訪れた百人の小学生にアンケートを行った。「広島に原爆が落とされた日は？」という質問に対して「8月6日」と答えられたのは44％。長崎の「8月9日」は24％しか、答えられなかった。その現実を前に、先輩たちは、「どうすれば広島や長崎が経験した核兵器の惨劇と核兵器廃絶の願いを後世に継承できるか」を考えた。そして、「中高生にもできる持続可能な平和活動」として街頭署名活動を思いたち、スタートさせた。16年間に集まった約65万筆はすべて、国連に提出された。だが、コロナ禍でここ3年、活動は中止。でも今年の夏から再開されることになった。私は7月下旬から、仲間といっしょに生まれて初めて、地元の福山と広島の街頭に立つ。

私の手を握り、切明さんは続けた。「平和は待っていても来てはくれないのよ。力を尽くして引き寄せ、つかみ取り、みんなで懸命に守らないと逃げるんです。いま、ウクライナで核兵器が使われ、戦争が広がったら、地球全体が滅びます。草木に至るまで根こそぎ滅びてしまうんです。私は、あなたたち若者を戦争や核兵器で死なせてなるもんですか、私と同じ経験をさせてなるもんですか、という思いで語っているんです。」

切明さんの力強い声に、私は愛を感じた。そしてその愛を、私は受け取った。私も日々ウクライナの惨劇に胸を痛めていただけに、その愛はずしりと重かった。

私も誰かに愛を与えられるようになりたい。そのためにも私は、切明さんたちヒバクシャの核廃絶の願いとウクライナの人々の悲しみを胸に刻んでこの夏、仲間と共に街頭に立つ。

佳作

今私が問い正したいこと

沖縄県那覇市立寄宮中学校三年
大島（おおしま） 千香（ちか）

「今、平和ですか？」

そう聞かれたら、私は「はい」と即答できるだろうか。

二〇二二年二月二十四日、全世界のテレビ画面にウクライナキーウ市内の惨状が映し出された。激しい爆発音、次々に崩れ落ちる建物、痛々しい姿で逃げ惑う人々。昨日までの日常が消え失せた街。市内にはサイレンが響き渡る。引き裂かれる家族、親と離ればなれになって不安を通り越し孤独に襲われる少女。私にとってその光景は全てが非日常だった。一人一人の人権と平和を尊重している現代に、戦禍に陥っている国があるだなんて。戦争は終わってなんかいない。まだ続いているのだと私は気付かされた。

それと同時に毎年慰霊の日を前に学習してきた七十八年前の沖縄戦のことが蘇る。人々は繰り返す。未だに同じ過ちを。ここ沖縄では七十八年前アメリカ軍が上陸し、多くの住民を巻き込む地上戦が繰り広げられた。学校では戦争に関する教育が行われ、武器の使用法、ケガ人の看護の仕方を教わったという。男子学生は戦場に送られ、女学生も工場で重労働をさせられるなど学生も戦争へ巻き込まれていった。そして多くの若者が尊い命を戦争によって奪われたのだ。

私の亡き祖父母は戦時中小学校低学年だったそうだ。祖父は私が生まれた時にはもう他界していたので、直接話をしたことはないが、祖母は元気で当時七十歳だった。私が小学校一年生の時、こう尋ねた。

「ねえねえ、おばあちゃんって戦争の時に生きていたんだよね。戦争ってどんなの？」

祖母は悲痛な表情で

「言いたくない、そんなの。」

と返した。私はそんな祖母の顔を今でも鮮明に覚えている。よほど苦しい体験だったに違いない。それでも私は祖母の事が知りたくて、しばらくして母に祖母のことを聞いてみた。

祖母は沖縄本島南部の具志頭から親戚達と共に新城へと必死に避難したという。しかし、避難した壕の中で、爆弾の破片が従姉妹と祖母に直撃し、従姉妹は即死、祖母は右腕を切断したそうだ。小学校低学年で死を間近で体験した祖母。その残酷な記憶を他人に語れるはずがない。私だったら戦争が憎くて憎くてしょうがないだろう。そして亡くなった従姉妹に対して右腕切断だけで済んだ事に心苦しさを持つだろう。何の罪もない少女の命が爆弾一つによって一瞬で散ったのだ。それが戦争というものなのだ。その時の祖母の気持ちは私の想像を絶するものだと思う。

二〇二三年六月二十三日、戦後七十八年目の慰霊の日。正午０時に黙祷の時間を告げるテレビの声やサイレンが県内各地に響き渡る。黙祷をしながら、私はこんなことを考えた。戦争体験者が減っている中、戦争の残酷さ、命の尊さ、平和の大切さを語り継いでいく使命は私達若者にある。世界中に響き渡り、世界の人々に伝わるように声を大にして誓いたい。「命どう宝、一人一人が輝く命、大切な平和を守り続ける理由は私達の生活の中にあると。再び沖縄戦のような壮絶な争いが繰り返されないよう、いつまでも皆で平和を守り続けていくことを。」

現在、沖縄県では与那国で宮古、石垣などの離島に自衛隊の配備が急速に進んでいる。この事態に県民の中には再び沖縄が戦場になるのではないかと不安の声も上がっている。確かに国を守るためには必要なことかもしれないが、その動きに不信感を抱く人も少なくないだろう。沖縄の人が七十八年前の戦争で学んだこと。「命どう宝。」戦争は多くの人々の尊い命と当たり前の日常を奪い去り、多くの人々を悲しみのどん底に追いやってしまう。二度と繰り返してはいけないということを今一度、私は多くの人々に問い正したい。

佳作

声なき声の叫びから未来へ

沖縄県糸満市立高嶺中学校一年
大城（おおしろ）　果音（かのん）

「遺骨？」「七十八年ぶりに見つかる？」私は、沖縄タイムス五月十九日付一面の「陣地壕、異例の女性遺骨」の記事を読みました。遺骨が見つかった場所、そこは私達の学校校区で照屋と国吉という地域でした。私の住んでいる地域で、陣地壕があり、九体の遺骨が発見されたことに、私は強い衝撃を受けました。

遺骨は、約二十年にわたり沖縄に通い、ボランティアで遺骨収集活動を行っている、青森県の報道写真家の浜田哲二さん、執筆家の律子さん夫婦によって発見されました。旧日本軍が駐留した陣地壕で女性の骨が見つかるのは異例で、四体からＤＮＡが抽出されたそうです。浜田さんはＤＮＡ鑑定の申請を行い、一日も早く遺骨が家族の元へ帰れるよう、願っているそうです。私は七十八年前に亡くなった方の遺骨からＤＮＡが抽出されたことに驚くと同時に、亡き人の声なき声を聞いた思いになりました。一体は少女の遺骨で、その遺骨近くには、赤い花柄の弁当箱があったそうです。きっと少女の弁当箱だったにちがいない。私はそう直感しました。七十八年もの間ずっと、暗黒の中、土に埋まっていた遺骨。その遺骨は、浜田さん夫婦によって、今、まぶしいほどの太陽の光を浴びたのです。そう考えると、私は重く辛い気持ちになると同時に、「ずっと待っていたんだね。」と明るい気持ちにもなりました。太陽の光がやっと差し込んだのですから。

毎年、私は六月二十三日の慰霊の日には、沖縄戦で亡くなった先祖に両手を合わせて祈ります。私の祖母も戦争体験者です。祖母は当時、八人家族で、八歳の小学校二年生で、戦争が始まると、授業中に空襲警報がなり、草むらに隠れながら壕に逃げていたそうです。ある日、壕の近くに爆弾が落ち、その破片が壕まで飛んできて、その被害は大きく、爆弾の破片で祖母の姉と妹たちは亡くなったそうです。祖母の兄には破片が貫通したそうです。祖母はその時に親とはぐれてしまい、祖母は兄と二人で小屋に隠れていたそうです。祖母は小屋の外へ用を済ませるため出て戻ってくると、アメリカ兵が鉄砲を構えていたため、祖母は怖くなり兄を置いて山へ逃げたそうです。当時の祖母は小学校二年生。一人で昼夜さまよいながら逃げていたことを考えると、私は生きている祖母が奇跡に思え、自然と涙が出てきました。今、私が生きていることも祖母がいるからこそ、命あってのことだということ。私は、命の尊さをずっしりと感じた。七十八年前もの遺骨が見つかった中には一体の少女の遺骨もあり、きっと生きていたら、祖母と同じくらいの年齢だろう。遺骨に太陽の光が差し込んで、私は亡き人の声を感じずにはいられない。私の祖母は戦中、一人になっても逃げ回り、幸いにも命はつながった。祖母は今まで沖縄戦について語らなかったが、私がどうしても聞きたいと話すと、祖母は重い口を開き、私に語ってくれたのです。祖母は、きっと過去の辛い経験は話したくなかったのだと思う。私は遺骨収集の話をすると、祖母は涙して手を合わせ、じっと目を閉じていた。私は祖母の語りを全身で感じ取ることができ、自分自身を見つめ直すことにもつながりました。遺骨が発見されたことで、私は私の住む地域のことを考え、七十八年前に戦争があった事実、地域の歴史をしっかりと学んでいきたいと思いました。収集された遺骨は言葉で語ることはありません。しかし、私達にメッセージを伝えていることは確かです。戦争が少女の未来を奪ってしまったのです。祖母は私にこう語ってくれました。「果音、戦争は絶対にしてはいけない。命があれば何だってできる。これから生きていく時代は、世界が平和であること。新しい未来を創っていくことだよ。」と。私は事実を受け取めて記録し、言葉で紡いでいくと決意した。新しい未来を切り開いていくために、先人の教えを胸に刻んで。

最優秀賞

戦争が作り出す未来

島根県大多和学園開星高等学校二年
大月（おおつき） 玲（れい）

日本中を震撼させた安倍晋三元首相への銃撃事件、今もなお続くロシアとウクライナ間での戦争、イエメンやシリア内戦、世界中で起きている様々な事件をテレビなどで耳にすることが多い今、平和について考える機会も多いのではないだろうか。

戦争が決して良いものではないということは、現代人ならだれでも知っていることである。戦争はするものではないし、原爆は落とすものではない。ただ、もしあの時戦争が始まらなかったら、原爆が落とされて日本が降伏していなかったら、私たちが今ここでこんな風に暮らしていることはなかったのかな、とも思う。

アジアの島国の一つであるフィリピンは、スペイン、アメリカ、日本という三つの国の植民地時代を持つ国だ。恥ずかしながら、そんな事実があるということを、現地に留学して実際に授業を受けるまで知らなかった。日本の占領下であった第二次世界大戦中の約三年間では、現地の学校などで日本語教育があったほか、多くの現地民が強制労働や性的暴行などの被害を受け、実に百万人以上もの人が命を落としたとされている。そんな悲惨な過去を持つのにも関わらずフィリピンは世界屈指の親日国家であるともいわれ、私が一年弱通っていた現地の学校でも、日本人である私を歓迎してくれていた。

フィリピンが親日国家だと思っていただけに、現地の授業で第二次世界大戦禍での日本とフィリピンの関係について学んだことは、ある意味ショックなことだった。日本が戦時中に甚大な被害を受けたのと同じように、日本によってもたらされた悲劇もあるのだ、と気付いた。その教室で自分だけが日本人であることに罪悪感を覚えたのだ。

「日本のアニメが大好き！」

「日本の政府は、たくさんの援助をしてくれている」

「別にレイン（私のあだ名）が戦争したわけじゃないでしょ」

「私も戦争経験してないし」

授業の後、少しショックを受けて落ち込んでしまった私を励まそうと、友達や先生がたくさんの優しい言葉をくれた。みんなが心からそう言ってくれているようで、今でもひどく心に残っている。みんなは、戦争をして憎みあっていた過去の日本ではなく、「今」の日本を見てくれているのだと実感した。

対立や戦争が起きた過去は変えられない。だから、大切なのは「過去どうであったか」ではなく、「今どうしているか」、そして「これからどうするのか」ということなのだと、フィリピンでの授業から学んだ。過去の対立をいつまでも引きずってゆくことはできるけれど、それでも前を向いて、今をポジティブにとらえる。それが、戦後を生きる我々に必要なものだと改めて感じた。

私は今の日本に生まれて幸せだと、心から言える。トイレは清潔で、ご飯もおいしいし戦争に怯える必要もない。この暮らしは、過去のおかげである。今の暮らしは、過去からずっとつながっている。もし戦争が始まり、そして終わらなかったら、また別の「未来」があったのだと思う。戦争が作り出した未来を私たちは生きている。その「未来」は、平和を作り出すこともできるし、対立を呼ぶこともできる。変えることのできない過去ではなく、相手とともに生きている今が大切なのだと、みんなにわかってもらいたい。

今現在起きている争いを急にやめることはできない。何かのきっかけが必要だ。そのきっかけが原爆や一方の降伏など、悲しいものにならないことを願っている。そして、第二次世界大戦直後の日本の人々が復興に向けて全力疾走し、今の私たちの暮らしを作り上げたように、私たちの行動一つ一つが、平和な未来を作っていくのだと信じてやまない。

優秀賞

「如己愛人」と僕らの未来

大阪府清風学園清風高等学校一年
田中泰斗（たなかひろと）

「戦争だけは絶対にあかん。」これは、亡くなった祖父の言葉だ。いつも穏やかで優しい祖父だった。そんな祖父は、かつて戦地で太平洋戦争を経験している。ある終戦記念日、僕は祖父の戦争体験について尋ねた。すると、笑顔だった祖父は、一瞬顔を曇らせ、おもむろに話し出した。「ある日、わしらの部隊は、敵の待ち伏せ攻撃におうてな。先遣隊は隠れてた敵兵に一斉に銃撃されて皆殺しや。わしらが合流した時には、もう一面が血の海やった。殺された仲間の中には、赤ん坊が産まれたと喜んでた奴もおった。我が子の顔を一目でも見たかったやろうに…。その時、わしらは誓こうたんや。あいつら一人残らず皆殺しにしたる！て。もう皆人間の顔をしてなかった。ケダモノの顔をしてた。戦争は、どんな人間でも鬼畜に変えてしまう。そやから、戦争だけは絶対にあかん。どんな理由があってもや。」今でも、その時の話は脳裏に焼き付いている。人を殺す行為が犯罪として裁かれるどころか、公然と推奨され、その殺人がさらに憎悪を増幅させ、社会全体が憎悪に支配されていく。戦争とは、狂気そのものだと感じた。

しかし現在も、祖父の思いとは裏腹に、ウクライナ、シリア、ミャンマー等、世界中で人間は戦争をしている。これまでに、歴史上、人間が起こした戦争の数は、一万回を超えるという。人間という種は、戦争をせずにはいられない生き物のようだ。ここで人間は愚かだといってしまうことは簡単だが、大切なことは、今後、どうすれば戦争をなくせるかだ。

きっと、その鍵は、正しい教育にあり、その核心は、永井隆博士が大切にされた「如己愛人」の精神に尽きると思う。すなわち、人間は、教育を通じて人格を形成する。幼い頃から人を憎むよう教育されれば、憎悪を抱えた人間が育ち、逆に、すべての人を愛するように育てられれば、慈愛に満ちた人間に育つだろう。正しい教育こそが、人間を正しい方向に導き、平和な社会を作るはずだ。

この点、誰もが、自分は何より大切だし、自分の家族も愛おしく思う。少なくとも、自分と同じ民族まではその対象に入るだろう。ところが、国境線を越えて、人種、言語、慣習、信条等が異なると、途端に「我ら」と「彼ら」を区別してしまう傾向が人間にはある。人間は自分と異質な存在を容易には受け容れられず、「彼ら」は、「我ら」とは違うからと排除を試みたり、「彼ら」は何を考えているかわからないから、やられる前にやってしまおうと考えたり、とても偏狭な発想に陥りがちである。「彼ら」を知らないことから生じる不信や嫌悪である。人々がそうした感情に囚われてしまうと、たとえ国際法で「戦争」を違法化しても、あえて「事変」や「特別軍事作戦」と呼び変えて、やらなければ、やられてしまうという「自衛」の論理で、平然と「戦争」を始めてしまう。現在のウクライナ侵攻の背景には、ウクライナが西側陣営に与すると、やがて西側の「彼ら」にロシアが攻め込まれかねないという不信があった。

しかし、実際には、「彼ら」に侵略の意志などなく、それは「我ら」の猜疑心が作り出した虚構でしかなかった。多くの場合、人間の争いはコミュニケーション不足から生まれる。対話によって相互理解を深めれば、平和共存の道も見つけられるだろう。なぜなら、「彼ら」も「我ら」と同じ人間であり、誰にも愛すべき家族や友人がいて、殺し合うより、助け合うことを望んでいるはずだからだ。

人間は、生来、臆病な生き物なのだろう。「彼ら」を信じられず、現在も世界中が戦争や核の恐怖におののいている。しかし、その恐怖の殻を破り、勇気をもって「彼ら」を「我ら」と同様に愛することができれば、僕たちの未来は変えられるはずだ。「彼ら」を信じる勇気、それは教育によって「如己愛人」の精神を養っていく以外に道はないだろう。

佳作

関係を結ぶ

東京都田園調布雙葉学園高等学校二年
中嶋優花（なかじま ゆうか）

小中高一貫教育の私の学校では修学旅行が小学校は広島、中学校は長崎、高校では沖縄を巡る慰霊の旅となる。そしてその旅行前には事前学習を行い、学びを深める機会が設けられる。カトリック教育を受ける私達は中三の夏、長崎の永井隆記念館を訪れるために彼について学んでいた。そんな時、友達が私に言った。

「今の私達には関係ないよね。」

無理やり勉強させられる雰囲気の漂う教室で、私達は彼の生き様を学んでも、戦争にまつわるエピソードを知ったという程度の感覚しか得ていなかった。

一週間後、実際に記念館を訪ねた。そこには原爆によって妻を亡くしたこと、被爆者の為に自分の命を削りながら研究にあたったことなど事前学習で学んだことが記されていた。しかし、その地を訪れた私達は教室内とは違う「学びたい」という衝動に駆られ、必死にその場から吸収できる何かを探した。それはきっと、現地を訪れることで、その事実がまるで自分が実際に経験したことのように感じられたからなのだと思う。事実、私達は永井隆に会ったわけでも戦争を体験したわけでもない。ただ彼が医者として働けなくなり余生を過ごした如己堂を目にした時、人が住んでいたとは思えない小さな部屋で最後まで貫いた父親としての威厳と、筆を口に咥えてまで綴った言葉の重みに感嘆した。自ら放射線を浴びながらも働く生き様に、その困難な時代を生きる苦悩と誰よりも平和を願う永井隆をその地で見つけた。そしてその瞬間、学年全員が彼の思いを継いで、平和を求める決意を固めた。私たちはもう傍観者ではなく、その歴史から逃れられない関係者となった。

高二となり、沖縄で最後の修学旅行を終え体感し学ぶ事を重ねた私は今、「関係者」となる事が平和を築く手がかりだと考えている。

この「関係」という言葉を私達は「私には関係ない」といったフレーズで使うことがよくある。実際、ウクライナ侵攻に関するテレビの調査で、若者世代では自分には影響がなく関係ないという回答が目立っていた。私はその結果に、どこか寂しさを感じながらも驚きはしなかった。そして、この「関係がない」という感覚をＳＮＳが助長させているのではないかと考え始めた。私のＳＮＳにはアイドルの情報ばかりが流れてくる。検索したワードや発信内容がＡＩによって分析され、カスタマイズされた情報が波のように溢れてくる。だからこそこのツールは、自分の好きな物や興味ある事柄を調べる際には便利である。しかし、いつの間にか自分好みの偏った情報の中に生き、日々自分の視野を自分で狭めていることに私達は危機感を持たなければいけない。ＳＮＳは人と人を繋ぐツールとして普及した筈なのにそれはいつしか私達を同質化し、一般的に関係がないと機械が判断したものを自分から遠ざけてしまっている。そしてそれぞれが自分が受け取る情報の波に溺れ、それが世の中の中心だと思い込み始める時、人々はそれが自分の自己主張だと思い、自分に見えている世界や意見こそが正しいものだと錯覚し始める。凝縮した自己主張が乱立する世の中は次第に平和を忘れていくだろう。

だからこそ私は、今の時代に関係ないものを関係あるものにする努力が必要なのではないかと思う。自分で関係ないと判断してしまうのは簡単なことだが、そこからは何も得られず自分の見える筈の世界を閉ざしてしまう。一見、他人と密に繋がれるように見えて、その距離感は以前よりも簡単に遠くなってしまうことに私達は気づくべきである。

そして永井隆も唱えたように、キリスト教における「隣人愛」を自分の中に育み、世界から孤立化しがちな時代の中で、隣人を、世界の人達を自分の「関係者」として愛することができる人でありたいと強く思う。

佳作

NeverGiveUp ～ヒロシマの信念を受け継いで～

広島県盈進学園盈進高等学校一年
大下真緒（おおしたまお）

「命の奪い合いをする戦争は、絶対反対。まして、一瞬にして多くの命を奪う核兵器は、非人道の極み。絶対悪。核兵器はこの世に一発でもあってはならない。」尊敬する元広島県被団協理事長の坪井直さんの言葉だ。私は、坪井さんを直接は知らない。でも、私は、学校の先輩方が彼から聞き取った証言集『坪井直、魂の叫び』に胸を打たれた。それ、以後、私の平和活動は、亡くなるまで核廃絶運動に人生を捧げた彼のこの言葉が原点となった。

坪井直さんは、オバマ前米国大統領が広島を訪れた２０１６年５月、彼と最初に握手を交わした被爆者だ。それから６年後の８月６日、４９７８名の原爆死没者名簿が、慰霊碑に納められたが、その中に坪井さんの名前もあった。

いま、「坪井さんならどう評価するだろう」と思うことがある。それは、今年５月に開催された「Ｇ７広島サミット」についてだ。

首脳らは平和資料館を視察し、被爆者の声を聴いた。そしてその後、「核軍縮に関するＧ７首脳広島ビジョン」を発表した。「ビジョン」は、ロシアによるウクライナ侵略に関し、「核兵器のいかなる使用も許されない」と厳しく批判する一方で、核兵器は、「防衛目的のために役割を果たし、侵略を抑止し、戦争と威圧を防止」するものだと主張した。これは、核は平和のために必要だという核抑止論を肯定するものであり、私は落胆した。

「サミット」を振り返って、元広島市長の秋葉忠利さんはこう語る。「核抑止力の必要を説く文書に『広島』とつけたのは冒瀆です。核を抑止する力を持っているのは被爆者です。その被爆者がいなくなった時のために核兵器禁止条約があるのです」（２０２３年６月21日付『朝日新聞』）。同じく元広島市長の平岡敬さんも、「抑止力の容認を広島で明言すべきではなかった」とした上で、「サミット」で打ち出すべきだったのは、「核兵器禁止条約への日本のオブザーバー参加など具体的行動だ」と述べた（２０２３年６月20日付『毎日新聞』）。

私はこれらの主張も踏まえ、私の気持ちを被爆者の清水弘士さん（81才）にぶつけた。彼は語った。「首脳たちは、被爆者の声を10分しか聴かなかった。それで何が伝わるのか。被爆者は裏切られたという気持ちが大きい。」

「サミット」を前に、私は仲間たちと英語で各首脳にあてて手紙を書いた。これまで学習してきた坪井さんら被爆者の証言を交えながら、「必ず被爆者に会ってほしい。そして、被爆者の手を握り、目を見て、被爆の実相を感じてほしい」と。それだけに、被爆者の方々が「裏切られた」と感じたこの現実を前にして、これから、私に何ができるだろうかと自問する日が続いた。「何もできない自分」を見つめ、そのモヤモヤを抱えながら。でも、やはり、私は、自分の原点としての『坪井直・魂の叫び』にたどり着いた。証言集を手に取ると、坪井さんの声が聞こえるようだった。

坪井さんは、爆心地から1.2km地点で被爆。20分ほど背中が燃えた状態で逃げ惑った。以後、手足、背中からおしりにかけてケロイドが残っていた。被爆者とその家族は、結婚や就職において、差別に怯えながら生き抜いた。坪井さんも、妻の家族から結婚を反対され、自殺未遂を図った壮絶な経験をもっていた。だけど坪井さんは必ず、いつも笑顔でこう訴えた。「NeverGiveUp」。それは、鉄より硬いヒロシマの信念であり、未来への希望だった。

そうだ。あきらめるわけにはいかない。世界を、被爆者の念願だった核兵器禁止条約へと導いたのは、核廃絶を訴えつづけた被爆者と、私がそうであったように、その思いに共感した世界の人々の存在だった。であるなら、私がヒロシマに生まれ育った人として、どんな状況でもあきらめず、被爆者の声を受け止め、伝え続けることが、坪井さんたち被爆者や世界の希望だと、私は思えるようになった。いま、私はこの気持ちを坪井さんに伝えたい。

最優秀賞

あなたのままでいい

徳島県
天竹（あまたけ） 勉（つとむ）

私は、戦後生まれで戦争を知らないが、戦争の傷跡は知っている。両親は肉親をなくす憂き目にあっている。自らも空襲の中を逃げ回り、どうにか生き延びて私に命をつないでくれた。だから戦争の悲惨さと愚かさは、私にも想像できる。

戦争を反省し、日本国憲法は制定された。その憲法の下で私は育った。生命と自由、そして幸福追求の権利を謳う憲法は、誇らしい。しかし今、世界はこの歩みからかけ離れている。ウクライナへの侵略戦争、国民や社会の分断、ごく簡単に人を殺めてしまう事件の多さ。生命とはそれ程軽いものなのか。人間の心の底に、自分の優位を正当化する利己主義と異質を認めない排他主義が同居している。例えば〇〇ファーストという主張には、他と区別をつけ差別化を図る意図がある。順列をつける。自分の所属が最も優先され、恩恵を受けるべきだと錯覚している。

私が小学校の教員をしていた二十五年前のことだ。一人の少女が転校してきた。学年も終わりの二月だった。帰国子女との連絡があったが、事情は複雑だった。彼女の祖母は中国残留孤児で、望郷の思いも強く家族全員で日本に帰国帰化したのである。

広島で三ヶ月間日本語や生活面での支援を受けたという。面会したとき、日本語での受け答えもしっかりしていて、わずか三ヶ月で

と驚いた。

「おばあちゃんに習いました」

彼女は日本行が決まってから毎日、祖母に日本語を教わっていたのだ。

「中国で五十年生活しましたが、日本語を忘れたことはありません。この子の役に立てるのがうれしいです」

白髪をかき上げる細い腕。どれほどの苦労があったか想像すらできなかった。しかし、この人もまた懸命に生き、孫に自分の命をつないでいるのだと思った。

父親はこう言って、頭を下げた。

「先生、この子は私たちの希望です。私にできることは何でもします」

それからの一ヶ月は慌ただしく過ぎ、彼女は五年生の新学期を迎えた。

私は、日本語と生活支援の担当になり、週の数時間を彼女と過ごすことになった。

今も忘れもしない。国語の教科書に、孟浩然の「春眠暁を覚えず」の漢詩が載っていた。これは彼女の方が先生だと思い、私は彼女に、中国語で読んでみてとたのんだ。彼女はにっこりとうなずき、中国語で漢詩を朗読した。よどみのない柔らかな発音と流れるような抑揚。つつみ込むような音の響き。彼女の朗読は衝撃だった。私はこの時初めて漢詩の、そして中国語の美しさを知った。

彼女の中国での学びに少しだけふれたような気がした。私の目の前に、生活習慣も文化も違う中国で育った一人の少女がいる。そして今、懸命に異文化の中で生きようとしている。

その彼女がひとりで泣いている。初めこそ転入生に興味を持ち、彼女の周りに集まっていた級友も、慣れと同時に微妙な生育の違いがあるのだろうか、彼女は一人でいることが多くなった。言葉にできない戸惑いや躊躇があったのかもしれない。目に見えない壁。前に進めずに後ろへ下がろうとする彼女の姿は痛ましかった。

彼女に自信を。担任は家庭科の実習に「手づくり餃子」を計画した。中国の家庭料理の水餃子。講師に彼女の父親を頼んだ。父親は快諾。生地も餡も子ども達で作る。彼女は父親とともに家の味を伝えていく。

「○○ちゃん、これからどうするの」

「○○ちゃん、教えて」

「○○ちゃん、私たちの方にも来て」

友だちに教えたり、うなずいたり、自信を取りもどしていく彼女があった。

私は、彼女の心に呼びかけた。

「あなたの中には悠久の大陸中国とここ日本との二つの篤い血が流れているのです。日本になじみ同化するのはなくて、あなたはあなたのままでいいのです。あなたの道を進んでください」

彼女はその後、県外の大学に進学し、文化の多様性について研究していると聞いた。

「この子は私たちの希望です」と語った父親の声が聞こえてくる。立派に成長した彼女に、私もまた勇気をもらう。

人は比較ではない。その人の輝きがある。その輝きで、自分の人生を彩るのはもちろんだが、周りの人の人生も彩ることができるのだ。永井博士の人生もそうだった。

「己の如く隣人を愛せよ」

人は人とともに人となる。己も隣人も、受け継いだ命を尊びその命を慈しむ想像力が必要なのだ。私は一人の少女から学んだ。

優秀賞

『いのる』から『つくる』平和へ

埼玉県
見澤富子（みさわとみこ）

今春、地元で開かれた日本ウクライナ交流会に参加した。その日は一緒に折り鶴を折り、平和を祈る。日本の文化で元気になってもらおうというのが主旨だった。

だが開始早々。それまで黙々と折り鶴を折っていたウクライナ人の女性が口を開いた。

「あなたは戦争を知ってるの？」

思わず耳を疑った。戦後生まれで何不自由なく過ごした幼少期。戦争については広島で語り部さんの話を聞いたくらい。隣の小学生は「そんなの知らないよ」と言い張る。これで彼女の心に寄り添えるはずがない。しかし彼女は続ける。

「私は避難するためスロバキア国境まで父と来ました。でも父はそこで引き返しました。ロシアと戦うためです」

周囲は別れを惜しむ人でいっぱいだったという。一度は別れを口にしたものの、離れない。キスをして、ハグをして。中には親とはぐれた子がたくさんいた。爆撃で手足を失った子や、片目を失った子だって。その目が見ているのは悲惨な未来だった。

すると主催者の女性がやって来た。どうやら彼女は御年八十七歳。広島で被爆した戦争経験者だ。

「私もそうだったの」

広島に原爆が投下された日。彼女は生臭い血の匂いに意識を戻された。「とにかく急いで避難してください」と言われ、山口県の柳井へ行くことになった。行く途中で見た光景は今も目に焼き付いている。焼き尽くされた国民学校。道に散らばる頭蓋骨や骨。父親らしい黒こげの死体を運ぶ小学生。「助けて下さい」「水、水、水を下さい」の声。

「ウクライナの戦場を見るとどうしてもあの頃を思い出してしまうの」

道端の遺体に母を重ね、親とはぐれた子どもにわが身を重ねる。そして今も悔やまれるのが……。

「傷痍軍人となって帰って来た父が、いきなり、むくっと立ち上がって『天皇陛下バンザイ』と言って倒れ、そのまま息を引き取りました。どうして父はあの時、戦争が憎い、戦争が嫌だと叫ぶことができなかったのか」

ため息の余韻は今も消えない。だからこそ平和教育のあり方には思うところがあるという。

「今、日本の平和学習は戦争経験者の話を聞くことが主流ですよね。でも私たちも高齢化してて、今後これまでのようなやり方はできなくなります。結局聞いて終わりじゃ意味がないってこと。必要なのは祈る、じゃなくて、つくる平和です」

今やＡＩを活用した様々な兵器が戦闘に投入される時代。そこに必要な〝燃料〟は『一人一人の声』かもしれない。私たちは最後に『平和のためにできること』を考えた。

その三ケ月後。

「いま困っている人がいる国の商品を買ってみました」

小学生のAさんがはちみつを見せた。おこづかいで買ったはちみつはウクライナ産。中学生のBさんは、差別をなくすという視点で市役所にオールジェンダートイレを設置する要望書を出した。大学生のEさん姉妹は「平和をつくるためにどうすればいいか」という街頭インタビューを実施し、核廃絶の署名活動も行った。私はまちづくりセンターで『多国籍食事会』を開いた。ロシア。ウクライナ。台湾。日本。事前に話し合って決めたメニューを一緒に調理し、交流を深める。皆で作ったボルシチ、ピロシキ、天ぷら。身振り手振りで「オイシイ」を表現する。その表情に国境などなかった。

平和と言われた時、我々に浮かぶ『かたち』は一つじゃない。そしてかたちが決まっていないからこそ様々なアイデアを出すことができる。正直ボルシチや天ぷらで核の廃止を訴えることはできないし、ウクライナ産のはちみつで亡くなった命は戻ってこない。ましてやオールジェンダートイレですべての差別が解決するわけではない。

それでも永井博士が言うように愛の世界に敵はない。互いを知り、歩み寄ることこそが愛の始まり。私の周りにもたくさんの『愛』がある。もちろん戦争を知らない人も、望んでないのにそうなってしまった人もいる。でもその多様な生き方や価値観こそかけがえのない財産。果たして『平和』という二文字のなかにどれだけの愛のかたちがあるんだろう。これだけは言い切れる。そのひとつひとつが尊い、と。大切なのは『どうか平和になりますように』ではなく『どうにか平和にしていこう』という姿勢。

これから戦後九十年、百年。

いのる平和からから、つくる平和へ。

私たちはここから声をあげていかなければならない。

佳作

反戦平和を伝え続ける朝顔の種

島根県
幸田和彦（こうだかずひこ）

今年、広島でG7サミットが開催された。韓国の大統領も招待され、岸田総理と共に平和公園内にある「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」を訪れたことが大きく報じられた。

そのニュースを見ながら、およそ三〇年前平和教育の一環として、当時担任をしていた小学六年生の子ども達と、この慰霊碑を訪れたことを思い出した。二万人余りという韓国の人達が原爆で犠牲になった史実から、原爆の恐ろしさと共に、あの戦争によってアジアの多くの人々が被害を被ったことを、子ども達と一緒に学んだ。あの時の平和公園での記憶が、両首脳の献花と黙祷を捧げる姿に重なった。

あの戦争を加害者の立場から語り、平和を願う団体があった。中国帰還者連絡会、略称「中帰連」である。敗戦後の一九五〇年、シベリア抑留者のうち約千人が、戦犯として中国の撫順戦犯収容所に収容された。そして六年の収容所生活の後、中国の人道的処遇によって一人も処罰されることなく帰国した。その人たちが立ち上げた団体である。

「中帰連」の人たちは、戦争中に自分たちが犯した加害の事実を証言することで、反戦平和の尊さを伝える活動を半世紀もの間続けた。島根県にも支部があり、私はそこでの証言活動に参加する機会があった。

背広を着た小柄な老人が「八〇才を越えて初めて証言します。」と嗚咽を堪えながら、罪のない農民を殺害した自分の非道を語られた。証言を聞いた私は、この老人がずっと抱えて来られたものの大きさに圧倒され、「話を聞かせて頂きありがとうございます。」と一言お礼を伝えるのが精一杯であった事を思い出す。この「加害者としての反省を原点として、争いのない平和な世界にしていきたい」という願いを直接聞かせて頂いたことは、子ども達に歴史を教える立場にあった私にとって、貴重な体験となった。そしてこの体験が私の中では、広島平和公園での「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」を尋ねる平和学習へとつながっていった。

教職を退き、高齢者と呼ばれる年齢になったが、「中帰連」の人たちの証言は、今でも私の道標となっている。「どうして自分達だけが…」と不満から始まった収容所での生活。その生活では、驚くことに被害者である中国人の職員から、人として大切に扱われたのである。いつしか「なぜ自分はあんな事をしたのだろう」と、仲間と共に自分の罪に向き合うようになっていった。そして、心から悔いる中で自分の罪を認めていった。そんな彼らの収容所生活での心情の変化、反省や後悔の証言から、多くの事を学ばせて頂いた。

彼らは反省のひとつに、兵士という強い立場にあった事で、自らの加害性に無自覚となり、罪を犯してしまった事を挙げている。が、彼らが戦場で陥った過ちと、今社会問題となっているセクハラやパワハラ、ネグレクトやDV、体罰などは、同じ構図で起きているように思う。子どもではなく親が、女性ではなく男性が、生徒ではなく教師が、自分が強い立場にあるが故に持つ加害の可能性に気づかない中で、弱い立場の者を傷つけているのではないだろうか。

人は被害には敏感だが、加害には鈍感である。そして加害は往々にして正当化され易い。戦場だから起こった事ではなく、日常の中にも潜んでいるこの「強い立場による加害の可能性」について敏感でありたいと思う。「もしかしたら気づかないうちに、誰かを傷つけていはしないか」そんな心構えを、日常生活の中での道標として持ちたい。その事が、弱者が安心して暮らせる優しい社会。そして、「中帰連」の人たちが願った、争いのない平和な世界につながっていくものと考える。

「中帰連」は会員の高齢化により二〇〇二年に解散した。が、彼らの証言は幾多の書籍となって残された。本以外にもう一つ、彼らの残したものがある。それは「赦しの花」と呼ばれる朝顔である。

中国の戦犯収容所から帰国する時、「もう二度と武器を持ってこの大陸に来ないで下さい。日本に帰ったら、きれいな花を咲かせて幸せな家族を築いて下さい。」そんな言葉と共に朝顔の種を渡された人がいた。その朝顔の種をもらった副島さんは、毎年朝顔を大切に育て、新たにできた種を友人や知人に配り続けた。そのささやかな活動はいつしか知れ渡り、種が持つ逸話に心を寄せた人たちの手で「赦しの花」という絵本にもなった。

私の庭にも、今年も赦しの朝顔が咲いた。きっと日本の各地で同じように咲いたことだろう。そしてまた、この種の由来を知らない誰かに、心からの反省がもたらした反戦平和の願いを語り継ぐ種として届くことだろう。私も微力ながらこの種を誰かに手渡す人となり、彼らの思いを伝え続けたい。

佳作

後悔の共有

愛知県
伊藤和泉

三十年ほど前、私は建築関連の営業に携わっていた。戸建て住宅に訪問して建物の修繕工事を請け負う。訪問先では建物に関する要望以外にも様々な話を聞かされてきた。高齢者の場合、榎を切ったように昔話を始めることも少なくない。無関心な話に相槌を打ちながら、タイミングを計って修繕工事の提案をする。それが私の仕事だった。

「儂は人を殺したんだよ」

七十代くらいの男性は自宅の掃き出し窓に腰を落とした。白い髪や長く伸びた眉毛とは対照的に、深い皺の刻まれた顔は浅黒く日焼けしている。老人の後からは古い畳と木の匂いが混ざった懐かしい香りが漂ってきた。

「そうなんですか……」

緊張感が私の身体を包み込んだ。言葉を詰まらせないように声を抑える。仕事上、幾度となく戦争の話は耳にしてきた。有事の最中に青春時代があった。多感な時期を戦いと共に過ごした。それが削れぬ硬い思い出として心に沈んでいるのだろう。

一言で戦争と言っても内容は多岐にわたった。空襲で家屋を失った話とか、配給が得られず空腹だった話とか、家族や友人を亡くした話など、それぞれにエピソードは深いものばかりであった。

そこに一つの違和感が生まれた。戦争であれば当たり前であるはずの行為を、誰も話題にしようとはしなかった。私は今日初めて「人を殺した」という話を耳にした。

「敵の兵隊だけじゃない。上官の指示とはいえ無抵抗の民間人も殺した。情報を洩らさない為に仕方のないことだと説明を受けた。儂が抵抗したところで実行犯が変わるだけだ。命令に背いた者は軍法会議にかけられることもなく、敵前逃亡扱いで処刑される。自らの正義を貫けば国賊として報告されるし、遺族は年金さえも受け取れなくなってしまう」

老人は手入れの行き届いていない庭木に目を移した。蒸し暑い熱気が微かに葉を揺らしている。彼の瞳に力は感じられなかった。複雑な思いが交錯しているようだ。

「後悔されているんですか?」

恐る恐る話に踏み込んだ。私は歴史の過ちに対して無関心に生きてきた。不条理な境遇に同情することはあっても、自ら責任を感じたことはない。出征したこともなければ、人を殺したこともない。抑々、戦争は私が生まれる前の出来事だ。私は非難される側の主張に耳を傾けようとしたことさえなかった。

「後悔していない兵士なんていない。他人に後悔を押しつけてきた士官のなかにはいるかも知れんけどな……」

老人は眉尻を下げた。瞳は地面に傾いている。蟻は暑さによろけながらも懸命に獲物を運んでいた。涼しくて安全な部屋で寛いでいる女王に成果を届ける為に。

「いまはお独りなんですか?」

私は取り繕う言葉も探し出せず話の流れを変えようと試みた。老

人の後ろにある部屋が視界に入った。紫外線で変色した畳が寂しさを強調している。畳の上には何もなかった。

「儂は被害者にはなれん。だからずっと独りだ。時間は止まったままだしな。あんたも自分の父や祖父が人殺しだったら嫌だろう?」

老人は目線を上げようとはしなかった。彼の瞳から生気が離れている。それは諦めの表情にも映った。

安全地帯にいる人が正論を説くことは難しくない。他人の粗を探し出して批判するのは楽しいだろう。ちょっとした神様気分にもなれる。ワイドショーではお馴染みの光景だ。

「この先、日本の平和は続きますか?」

答えに窮した私は強引に舵を切った。老人の言葉に自分の身が重なる。明らかな程度の違いはあるが似たような経験はあった。社会には努力だけでは抗えない現実がある。学歴のある者、立場が上の者、環境に守られた者に逆らうことなどできない。選択肢の無かった人生を、選択肢のあった者が高台の上から否定する。僅かばかりの糧を得る為に、他人の責任まで背負い込むしかない人生だった。

「綺麗事だけで平和は継続できないだろう。他人の後悔を自分に置き換えられるかどうかだな。そうでなければいつか同じ轍を踏む」

老人は顔を上げることなく話を終えた。日本が敗戦してルールは上書きされた。善悪が逆転してしまった。人生の途中で信じてきた価値観を変更されることは辛い。

彼は人を殺し、その事実を飲み込み、苦しみのなかに人生の大半を費やしてきた。取り返せない後悔を背負って生きてきた。

彼の人生は決して他人事ではない。未来の自分が通る道かも知れない。願えば叶うほど平和は安定していない。あなたが理不尽な加害者にならない為にも、彼の苦しみを共有して欲しい。それが平和の維持に繋がる正解の一つではないだろうか。

第33回　島根県雲南市永井隆平和賞
最終選考作品一覧ならびに結果

【小学生低学年の部】

名原元樹	おとなになるだいいっぽ	島根県	雲南市立鍋山小学校一年	最優秀賞
石﨑いろは	すなおな気持ち、やさしい言葉	島根県	雲南市立掛合小学校三年	優秀賞
松尾扶美	みんながしあわせ、わたしもしあわせ	島根県	雲南市立三刀屋小学校三年	佳作
飯石奏斗	わすれられない友だち	島根県	雲南市立三刀屋小学校二年	
河部剣心	心がホカホカになるには	島根県	雲南市立鍋山小学校二年	
渡部輝	しあわせって何だろう	島根県	雲南市立鍋山小学校三年	

【小学生高学年の部】

朝山華乃	愛他的な「普通」を求めて	島根県	雲南市立掛合小学校六年	最優秀賞
山根旺大	戦争は犯罪ではないの？	島根県	雲南市立寺領小学校六年	優秀賞
山根美心	私たちの生活と平和	島根県	雲南市立海潮小学校六年	佳作
大坪紗千	「一歩一歩で世界を変える」	長崎県	長崎市立山里小学校五年	佳作
杉本実莉	美しい生命	長崎県	長崎市立山里小学校五年	
永瀬小夏	自分の思いを伝える勇気	島根県	雲南市立掛合小学校五年	
林　優羽	心配してくれてありがとう	長崎県	長崎市立山里小学校五年	
佐藤仁彦	僕たちのふつうの生活は…	島根県	雲南市立三刀屋小学校六年	
清水紘太	一つの命	島根県	雲南市立掛合小学校六年	
森山こころ	六年生になり初めて知った事	島根県	雲南市立大東小学校六年	

【中学生の部】

五味愛琳	彼女の笑顔を見る、その時まで	韓国	ソウル日本人学校中学部三年	最優秀賞
山本花奈	切明さんの愛を受け取って	広島県	盈進学園盈進中学校二年	優秀賞
大島千香	今私が問い正したいこと	沖縄県	那覇市立寄宮中学校三年	佳作
大城果音	声なき声の叫びから未来へ	沖縄県	糸満市立高嶺中学校一年	佳作

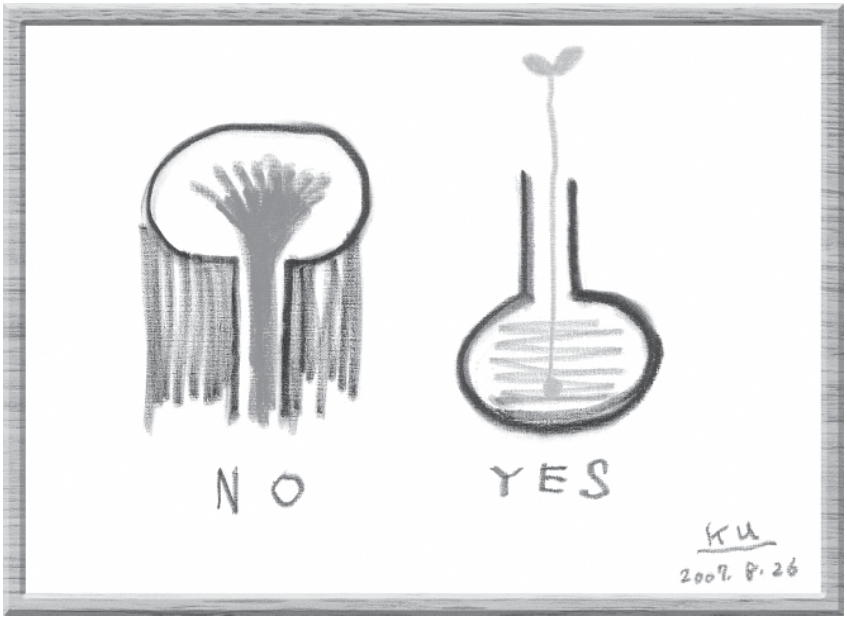
大木梨愛	受け継いだ思い、次世代へ繋ぐ	長崎県	長崎市立日見中学校二年	
原田京香	日常と平和を繋げる	長崎県	長崎市立淵中学校二年	
カーシュ巴菜	平和だということ	大阪府	大阪女学院中学校三年	
黒川海空	「愛が生むもの」	長崎県	長崎市立山里中学校三年	
仲原仁菜	紡ぐ日常	沖縄県	那覇市立寄宮中学校三年	

【高校生の部】

大月玲	戦争が作り出す未来	島根県	大多和学園開星高等学校二年	最優秀賞
田中泰斗	「如己愛人」と僕らの未来	大阪府	清風学園清風高等学校一年	優秀賞
中嶋優花	関係を結ぶ	東京都	田園調布雙葉学園高等学校二年	佳作
大下真緒	Never Give Up ～ヒロシマの信念を受け継いで～	広島県	盈進学園盈進高等学校一年	佳作
石橋勇人	偽愛	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	
仲宗根早紀	今を生きる	沖縄県	KBC学園未来高等学校二年	
宮崎優羽奈	愛と平和	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	

【一般の部】

天竹勉	あなたのままでいい	徳島県		最優秀賞
見澤富子	『いのる』から『つくる』平和へ	埼玉県		優秀賞
幸田和彦	反戦平和を伝え続ける朝顔の種	島根県		佳作
伊藤和泉	後悔の共有	愛知県		佳作
岡輝明	許し合うということ	山口県		
金城七瑠	未来を守るために	沖縄県		
立木英夫	戦争ごっこ	長崎県		
平野恵子	平和を繋ぐ	神奈川県		
森玲子	愛をこめて、平和を創る	広島県		
吉冨容子	永井博士様	長崎県		


NO
YES
KU
2007. 8. 26